

# トランプをめぐるアメリカ保守主義の現在

——旗幟を鮮明にする西海岸シユトラウス学派——

井 上 弘 貴

- 1 反トランプと親トランプに分かれた保守の知識人たち
- 2 われら建国の父祖の子ら——社会的保守主義者としてのジャファ
- 3 「ユナイテッド航空九三便テロ」としての大統領選——ポリティカル・コレクトネスに抗して
- 4 もうひとつのネオコンの隆盛の始まり？

## 1 反トランプと親トランプに分かれた保守の知識人たち

二〇一五年から二〇一六年にかけての予備選挙戦を経て、二〇一六年一月におこなわれた大統領選挙は、一七名による候補者レースのなかから最終的に共和党の大統領候補に選ばれたドナルド・トランプが、民主党のヒラリー・クリントン候補を制して決着した。それ以前の選挙戦と同様に今回においても、両陣営からの相手候補にたいする批

トランプをめぐるアメリカ保守主義の現在（井上）

判とそれになりたいする応酬は随所でみられたものの、この二〇一六年の選挙の特徴を共和党エスタブリッシュメントの動向に限って挙げるとすれば、それはトランプを最終的に選んだ共和党ないしはその周辺から、トランプにたいする批判や不信が根強く噴出し続けたという点にあるだろう。党大会でのテッド・クルーズの発言や、ポール・ライアンの紆余曲折をともなった長い躊躇はその象徴であったが、明確にヒラリーを支持する声や、トランプへの支持を控える有力者は一定数存在した。<sup>(1)</sup>

大統領選挙であれ、議会選挙であれ、共和党の候補者を支持する保守の知識人たちのなかでも、今回の大統領選挙においては、トランプにたいする明確な反対の意思を事前に表明した者たちは少なくなかった。たとえばアイオワでの黨員集会を目前にして、二〇一六年一月二二日付で『ナショナル・レビュー』誌のウェブサイトには、保守の立場に立つ著述家兼ラジオホストとして知られるグレン・ベックを筆頭にして、二二名の保守系知識人たちによる反トランプのメッセージが掲載された（これらのメッセージは、二〇一六年二月一五日発行の『ナショナル・レビュー』誌にも掲載された）。<sup>(2)</sup>

「本物の保守主義者は、われわれとともに歩むものである。ロナルド・レーガンは知的栄養をとるために『ナショナル・レビュー』誌や『ヒューマン・イ벤ツ』誌（一九四四年にフェリックス・モーレイ（Felix Morley）、フランク・ハニエン（Frank Hanighen）、ヘンリー・レグネリー（Henry Regnery）によって創刊された保守系雑誌）を読んだものだ。<sup>(3)</sup>」たとえばブレント・ボゼル三世はこのようにレーガンとの対比のなかで、トランプと保守の知識人との相容れなさを述べている。

ウィリアム（ビル）・クリストルは、『ザ・フェデラリスト・ペーパーズ』の連邦主義について論じた第三九篇に触

れたうえで、トランプは自由の信者ではなく富の信者であり、自己統治の技芸ではなく、取引の技芸 (the art of the deal) ——これはトランプの自伝の題名でもある——に駆り立てられてきたのではないのかと疑問を提起し、かのレオ・シュトラウスに保守とは何かを仮託させて、トランプ批判をつぎのように展開した。

『ナショナル・レビュー』誌に宛てたある手紙のなかで、レオ・シュトラウスはかつてこう書いた。「わたしが理解するに、保守というのは卑俗さを軽蔑する者ですが、成功の打算ばかりに関心をもち、努力の高貴さに盲目的議論は卑俗です。」ドナルド・トランプは卑俗さの縮図そのものではないのか。要するに、トランプ主義とはアメリカの保守主義者たちがつねに軽蔑してきた類いの、安物のカエサル主義ではないのか。今日のアメリカの保守主義者たちの仕事は、トランプ主義の前に立ちほだかり、止まれと叫ぶことではないのか。<sup>(4)</sup>

クリストルとともに、二〇〇〇年代のG・W・ブッシュ政権の時代にネオコンの知識人のひとりとしてその名前を国内外で知られたロバート・ケーガンも、五月の段階で『ワシントン・ポスト』紙にトランプ批判の論説を掲載している。ケーガンにしたがえば、トランプが広範な有権者を掘り起こしていることに共和党の政治家たちは驚いているかもしれないが、トランプが掘り起こしているものこそ、建国の父祖たちがかつて恐れた「群衆支配 (mobocracy)」であり、民衆の激情を解き放つことは、より多くのデモクラシーではなく、僭主の到来をもたらすと——フランス革命を観察したハミルトンに触れつつ——警告している。<sup>(5)</sup>

保守主義の立場に立つジャーナリストとして著名なジョージ・F・ウィルもまた、クリストルと同様に『ワシントン

ン・ポスト」紙への寄稿のなかで、トランプにたいする不支持を明確にし、もしもトランプが指名を獲得した場合に「保守の本質 (conservative essentials)」を侮蔑した当然の報いとして全米五〇州でかれを敗北させること、ならびに、議会の保守系の候補者たちを反トランプの引き波から守ること、このふたつが保守主義者の課題であると主張した。<sup>(6)</sup> なお、その後ウィルは、下院議長のリアンがトランプ支持をひとまず表明した六月、バリー・ゴールドウォーター以来の自らの共和党支持をとりやめることを発表した。<sup>(7)</sup>

こうした一連の論者たちの動向からは、幅広い保守の知識人たちが「反トランプ (Never Trump)」の立場を共有したことが見てとれるだろう。しかし、今回の大統領選挙と関連したアメリカの知識人の動向として注目すべきことは、保守主義の側に立つ少なからざる知識人が反トランプの立場に立ったのにたいして、明確にトランプ支持を表明した一群の保守の知識人たちも他方には存在したということである。<sup>(8)</sup> とくに具体的な名前を挙げるなら、チャールズ・R・ケスラー (Charles R. Kesler)、ジョン・マリニ (John Marini)、ケン・マズギ (Ken Masugi)、アンジェロ・M・コードヴィラ (Angelo M. Codevilla)、エドワード・J・アーラー (Edward J. Eher)、トーマス・G・ウェスト (Thomas G. West)、そして匿名の論客として「アメリカン・グレイトネス (American Greatness)」というウェブサイトの運営にかかわりつつ、そこで論考を発表しているプブリウス・デキウス・ムス (Publius Decius Mus) らである。かれらの共通点は、西海岸のクレアモント・インスティテュートにかかわっている、あるいはこの機関が発行している『クレアモント・レビュー・オブ・ブックス』誌に寄稿している点にある。<sup>(9)</sup> このクレアモント・インスティテュートは、クリストルの引用にも登場しているシュトラウスの初期の弟子のひとりであるハリー・V・ジャファが長らくフェローとして在籍した研究機関であり、右に挙げた一群の人びとはこのジャファの薫陶を何らかのかたちで受け

た者たちである。<sup>(10)</sup>かれらは今日、東海岸のシュトラウス学派と区別するために、西海岸のシュトラウス学派として自他とも呼ばれる。<sup>(11)</sup>親トランプ (Pro-Trump) の論陣を張ったのは主に、この西海岸シュトラウス学派に連なる知識人たちであった。<sup>(12)</sup>

本稿は、西海岸シュトラウス学派の論者たちのトランプ支持の論拠を考察するに先立って、かれらの先達であるジャファについて論じる。とくに、二〇一五年に亡くなったジャファの遺した著述のなかで、かれが同性愛について激しく批判している論考を取り上げ、ジャファの社会的保守主義者としての側面を確認する。そのうえで、西海岸シュトラウス学派に連なる一群の知識人たちが、現在のアメリカの状況を危機に瀕する共和国として位置づけたうえで、この危機の源泉をポリティカル・コレクトネス (「政治的正しさ」) に見出し、ポリティカル・コレクトネスに正面から国旗を翻すトランプを擁護していくその論理について検討をおこないたい。

## 2 われら建国の父祖の子ら——社会的保守主義者としてのジャファ

シュトラウスがシカゴ大学に着任する以前、ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチで教鞭をとっていた時期、かれの初期の弟子となったジャファは、古典的政治哲学にたいしてシュトラウスがおこなった注意深い読解を、エイブラハム・リンカンを中心とするアメリカ史の理解へと応用することで、独自の領野を切り拓いた。今日においてリンカン研究の古典のひとつになっている『分かれたる家の危機』(一九五九年)のなかでジャファは、リンカンとスティーヴン・A・ダグラスのあいだでなされたリンカン⇨ダグラス論争を、プラトンの『国家』における

ソクラテスとトラシユマコスの対話に重ね合わせつつ、自分たちの権利を生み出すために設立された憲法こそが自分たちにとっての障壁であるという、情念に突き動かされた確信が生じつつあるなか、民衆の自己統治という高貴かつ困難な課題をやりとげたリンカンのなかに、アリストテレス的な賢慮の行使を見出した<sup>(13)</sup>。

さらに後にジャファは、そもそも建国の父祖たちの思想のなかで、アリストテレスとジョン・ロックとは独特なかたちで融合していたという見解を採るようになっていく<sup>(14)</sup>。こうした見解の採用は、トマス・ホッブズと同様に、あるいはホッブズ以上に政治的快樂主義者として、欲望の無限の肯定への道を開いた思想家としてロックを位置づける秘教的なロック解釈からの離脱を意味するものであり、アメリカ建国の思想的源泉であるロック解釈をめぐる違い——秘教的なロックかそれとも顕教的なロックか——が、今日において東海岸のシュトラウス学派と西海岸のシュトラウス学派を分け隔てるひとつの大きな基準点になっていることは、最晩年のジャファも確認しているところである<sup>(15)</sup>。

ただし、東海岸のシュトラウス学派と西海岸のシュトラウス学派を分け隔てる基準点は、そうしたロック解釈をめぐる違いにとどまるものではない。ジャファが、一九六四年の大統領選で共和党の大統領候補であったゴールドウォーターのスピーチライターを務めたという事実は、よく知られたエピソードである。ゴールドウォーターの演説での有名な一節である「自由を追求するにあつての過激主義は悪徳ではない。正義を追求するにあつての中庸は美徳ではない」は、ジャファの手による。政治的アクティヴィズムからは距離を置き続けたシュトラウスにたいして、ジャファは同時代の政治的争点にたいして、しばしば積極的にかかわった。そのジャファにとって、おそらくもつとも論争的な争点であつたのが同性愛だつたと言える。ジャファは、ゲイという肯定的な表記を拒否し、「ソドミー」ならびに「ソドマイト」を用いて、同性愛にたいする激しい批判を多く残している。

ジャファが一九八〇年代に出版した論文集である『アメリカ保守主義とアメリカの建国』（初版は一九八四年<sup>16</sup>）の補遺として巻末に掲載されている「ソドミーとアカデミー——「解放」の倫理学による家族と道徳にたいする攻撃」は、そうした批判を記したかれの代表的な論考である。この論考は、クレアモント・マッキナ・カレッジでジャファの同僚であったステイヴン・スミス教授の、自己解放の勧めを説く授業内容、あるいはそのスミス教授によるカレッジの学内誌への同様の寄稿内容にたいして、ジャファが痛烈な批判をおこなったものである。

ジャファはこの論考のなかで、男性や女性は、社会によって各々の自己に割り振られた、「ステレオタイプ化された」役割であり、自己解放とはそのような役割からの解放であるというスミス教授の立場を強く否定している。ジャファにとつて、男性と女性との区別は、あらゆる区別のなかでもっとも根本的なものであり、人間と獣、さらには人間と神との区別よりも根本的なものだった。<sup>17</sup> ジャファにしたがえば、政治的共同体は正義に基づくパートナーシップであり、エロスではなくノモスに基礎を置くものではあるものの、正義への情熱が存在するためには、家族のエロスのなかにある何かが、政体のノモスへと引き継がなければならない。まさにアメリカにおいては、われわれに法を与えた建国の父祖たちは、自分たちの国の父であり、われわれはその同じ父祖たちの子らであることを見出すのだとジャファは言う。<sup>18</sup>

したがってそのような政治的共同体のパートナーシップの基礎にあるのは、諸々の家族のパートナーシップであり、家族は男性と女性の結合から生じるパートナーシップである。「家族のなかでこそ、将来の市民は市民社会のより大きな正義のパートナーになることを学ぶ<sup>19</sup>」。家族はけっして、スミス教授が言うような自己から生じるのではないことをジャファは強調する。そうであれば、近親相姦にくわえて「ソドミー」の禁止は、ジャファにとつて原始的な迷

信のようなものではまったくなかった。理性と自然／本性は私たちに、これらの禁止なくして、家族ならびに家族内の權威の仕組みは崩壊してしまうことを教えている。家族内の道徳教育は不可能になるだろう。家族それ自体は成り立たなくなるだろう。<sup>(20)</sup>それはジャファにとって、政治的共同体が成り立たなくなることを意味する。

以上のような「ソドミーとアカデミー」での議論は、一九七〇年に創刊以来、シュトラウス本人もかつて寄稿したシュトラウス学派にとつて歴史ある学術誌、『インタープリテーション』誌の一九八八年秋号に掲載された、アラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』にかんする書評論文でも繰り返されている。ジャファと、今日において東海岸のシュトラウス学派を代表する人物して知られるブルームとは、一九六四年に『シエイクスピアの政治学』を共著で出版しているように、かつては共同研究をする緊密な仲であった。<sup>(21)</sup>しかしジャファはブルームのみならず、ソクラテス的な哲学者の政治的立ち位置をめぐるシュトラウスの理解をめぐって、一九七〇年代に多くのシュトラウスの弟子たちと距離をとるようになっていった。<sup>(22)</sup>そうしたなか、ブルームが『アメリカン・マインドの終焉』を刊行し、それがベストセラーとなった一九八〇年代後半に、ジャファとブルームの不一致は明らかなものになり、それは個人間の関係を越えて、シュトラウス学派の分裂という状況を決定的なものにしていったと言える。

ブルームは『アメリカン・マインドの終焉』のなかで、アメリカ社会ならびに高等教育に蔓延している相対主義やニヒリズムに抗して、聖書を含めた西洋古典の偉大なる書物 (The Great Books) を読み取り、エデュケーション (一般教養教育) の重要性を対置した。<sup>(23)</sup>ブルームはまた相対主義と併せて、自己利益のみを社会の基盤にする近代啓蒙思想を、『アメリカン・マインドの終焉』において批判の俎上に載せているが、その近代啓蒙思想を代表する思想家として位置づけられるのが、ブルームによればロックであった。<sup>(24)</sup>



ブルームのこの『アメリカン・マインドの終焉』にたいしてジャファは、とくに書評論文の後段でそのロックの教説の解釈を含めたブルームのアメリカ理解にたいして、多くの紙幅を割いて批判を展開している。本稿ではこの書評論文の前段の部分にのみ、焦点を当てておきたい。その書評論文の前段の部分においてジャファが論じていることは、アメリカに蔓延している相対主義の最悪の表現は、同性愛の公的な承認を求めるゲイ解放運動であるにもかかわらず、ブルームは『アメリカン・マインドの終焉』のなかで、その点についてまったく沈黙しているということであった。<sup>(26)</sup>

この書評論文においてもジャファは、モラルと法的権利の両面で「ソドミー」を承認せよという要求は、人間の行為のあらゆる客観的な基準の、もつとも完全な否定であると強く断じている。ジャファにしたがえば、種は新しい個体を生むことのできる両性の個体の存在によって規定されるのであり、男性性と女性性は自然の基礎である。他方で、神の似姿にもとづいて人が創造される際、神は人を男性と女性とに創造されたと聖書は記している。それゆえに、いわゆる「ゲイ・ライツ」の運動は自然／本性の究極的な否定であり、したがってあらゆる道徳性の根拠の究極的な否定である。<sup>(26)</sup>

ジャファにとって、同性愛と異性愛とを同等の権利として認めるように求める動きは、男性と女性との本質的な区別をいざれ破壊するような、相対主義の最悪の形態として映っていた。それにたいしてブルームが、一九八〇年代のアメリカの大学における道徳的危機を主張しながら、この論点について『アメリカン・マインドの終焉』でほぼ完全に沈黙していることをジャファは強く批判している。<sup>(27)</sup> ジャファの批判は次の引用に端的にあらわれているように、HIVは同性愛者にたいする神の罰であるという、キリスト教保守派に近似した主張に収斂していくことになる。

エイズ禍の時系列は、ソドミーとレズビアンズムを推奨されるライフスタイルとして確立しようという公的な運動と、まさに一致する。同性愛の承認以上に、相対主義の力——とアメリカの高等教育の不名誉——を明らかにしているものはない。しかし教育の権威者たちの態度がどのようなものであれ、神と自然は、手ひどい懲罰をおこなっている。このライフスタイルは、死のスタイル (deathstyle) であることがあきらかになっている。<sup>(28)</sup>

言うまでもなく、HIVが同性愛者固有の疾病であるという誤った理解は、発症のメカニズムの解明によって退けられ、その後の啓発活動によって偏見をなくす取り組みが進められていった。だが、ジャファの反同性愛の信念はその後も、いささかも揺るがなかったように思われる。

本節で取り上げた「ソドミーとアカデミー」が所収されている『アメリカ保守主義とアメリカの建国』は、ジャファの八〇歳の誕生日とクレアモント・インステイチュートの創立二〇周年を記念して、二〇〇二年当時、絶版となっていた他のジャファのいくつかの著作とともにクレアモント・インステイチュートから再版されている。その際、補遺の「ソドミーとアカデミー」は削除も注記も含めて、とくに何も追加の措置がなされることなく、初版と変わらずに掲載された。これは、初版当時の形態をそのまま保持したという消極的な意味ではなく、初版当時から二〇年弱を経ても、ジャファの同性愛にかんする見解に変化のないことを積極的に示しているように思われる。

また、ジャファの最晩年の二〇一二年に刊行された『分かたれたるシュトラウスという危機——レオ・シュトラウスと東部と西部のシュトラウス学派にかんする論考』には、ジャファ夫人であるマージョリー・ジャファとの思い出の写真が掲載されている。<sup>(29)</sup> 研究者の論文集、しかもジャファの他の論文集と同様にきわめて論争的な論文集にそのよ

うな夫妻の写真が掲載されていることは異例に映るものの、それは夫妻の単なる思い出の披歴ではなく、男性と女性との結合から生じるパートナーシップこそが政治的共同体——ジャファにとっては明確にアメリカ——の基礎にあるのだという、本節で確認したジャファの政治的立場についての行為遂行的な表明として理解することができよう。

以上の検討から明らかのように、ジャファはシュトラウスの高弟たちのなかでも、とりわけ社会的保守としての主張を明確に保持していた人物であった。そのかれの信念は、クレアモント・インスティテュートをはじめとするクレアモントの各教育研究機関をつうじて、今日、西海岸シュトラウス学派と呼ばれるようになる多くの後継者たちに引き継がれていると言える。その継承された信念は、二〇一六年の大統領選挙戦のなかでトランプ支持とどのように結びついていったのだろうか。次節ではその点の考察に進むことにしよう。

### 3 「ユナイテッド航空九三便テロ」としての大統領選

——ポリテイカル・コレクトネスに抗して

自らの正体を明かしていないプブリウス・デキウス・ムスは、二〇一六年九月、「ユナイテッド航空九三便としての選挙 (The Flight 93 Election)」という論説を『クレアモント・レビュー・オブ・ブックス』誌のウェブサイトに発表している。<sup>(30)</sup> ユナイテッド航空九三便は、9・11テロの際にハイジャックされた四機のうちの一機であり、コクピットを奪還しようとした乗客たちの活動によって、ハイジャック犯は目標への突入を断念して当機を墜落させたと推測されている。乗客たちの決死の試みは英雄的な行為として讃えられ、のちには映画化もされている。

デキウスはこの事件に二〇一六年の大統領選挙を重ねさせる。コクピットを強襲するか死ぬか。いずれにしても死ぬかもしれない。しかし、試みなければ死は確実である。ヒラリーが大統領になることは自動小銃でロシアンルーレットをするに等しいが、トランプの場合は、少なくともシリンドラーを回転させて、チャンスはある。デキウスはこのように論説の冒頭で主張する。デキウスのこの挑発的ともとれる主張から見るとれるように、かれはトランプを、自らの理想的な候補者として諸手を挙げて支持しているわけではない。しかし現下の状況において、アメリカの保守はトランプを支持する以外の選択肢を有していないということを、デキウスは同様に強調している。

デキウスによれば、アメリカの保守は少なくとも二〇一〇年近くにわたって、「アメリカと西洋」が悪い方向に向かっているという可能性を受け入れることを嫌がる一方、アメリカという政治体が罹っている害悪をただ述べ立てることに終始することで、結局のところ現状維持の番人になってしまっている。かれらは「崖に向かって」にもかかわらず、進路を変えて崖を避ける緊急の必要性を感じていない。墮落した共和国においてのみ、トランプのような人物はあらわれてくるにもかかわらず、トランプをきわめて恐れている者たちが、共和国が死に向かいつつある可能性を考察したがるならないというのは不可解なことであるとデキウスは主張している。

さらにデキウスの主張に沿うなら、トランプはトーマス・デュイー以来もつともリベラルな共和党の候補者であり、あまりにも多くの点で保守主義の正統から逸脱している。だが、選挙戦の核となっている課題に目を向ければ、トランプの選択は適切である。すなわちトランプ主義とは、経済的ナショナリズム、アメリカ・ファーストの外交政策であり、なによりも、メキシコ国境に壁を建設するとの発言のとおり、国境の安全である。

この最後の争点をめぐって、「大量移民 (mass immigration) の神聖さはアメリカの支配階級と知識階級とをつなぐ

神秘的な紐」であるとデキウスは述べている。デキウスが「ダボス階級 (Davos class)」と呼ぶグローバル経済から利益を得ている人びとやその議会での代弁者たちは、安価な労働力を求めている。その一方で、左派と民主党支持者たちは、自分たちに有利な潜在的有権者を増やそうしているだけでなく、「アメリカの本質的に人種差別的で邪悪な性質は、さらなる大いなる多様性によつてのみ償うことができる」というアカデミズムと知識人の嘘」を信じている。それにはたいして共和党支持者と保守主義者は、「人種差別」という批判を恐れて及び腰である。

こうしたなか、唯一トランプだけが、現状維持という保守の惰性を打ち破る政治指導者として姿をあらわした。まさにトランプは、アメリカの保守が陥っているこの愚かな状況を終わらせるためにあらわれたのだとデキウスは言う。

そう、トランプは不完全よりもさらに悪い。だから、どうしたと言うのか。われわれは、自分たちの時代の根本的な諸課題に取り組むことのできる、あるいはもつと重要なことだが、それらの諸課題をつなぎ合わせることでできる偉大な政治家の不在が終わるまで、嘆き続けることもできる。「中略」道化と思われるトランプだけが、三つすべて〔貿易、戦争、移民〕と、それらの本質的なつながりを理解しただけでなく、それらに基づいて〔候補者レースに〕勝つことができたのである。かくして、この道化と思われる者は、あれほどまでにかれに激しく反対したわれわれの賢くかつ善き者たち (our wise-and-good) の誰よりも、賢慮がある (prudent)。

ここでデキウスがトランプにたいして賢慮という言葉を用いているのは、ある種のブラックジョークであると受けとめる読み手もあるかもしれない。しかし、引用部分の冒頭においてトランプを、多くの人びとがそうするように半

ばこき下ろしつつ、デキウスは言葉の文字どおりの意味において、トランプには賢慮があると述べているように思われる。いずれにしても反トランプを標榜するなら、それはおのずから親ヒラリーの受容を意味するのであり、その行き着く先は、カエサル主義か、連邦からの脱退か、「経営者たちによるダボスのリベラリズム」であろうとデキウスは警告している。デキウスは匿名であるがゆえに、その主張はきわめて率直である。

トランプが保守にとつて理想的な指導者でないことは承知のうえで、アメリカの危機とかれらが考えているもの的確に取り組もうとしているのはトランプをおいて他にいないとみなす西海岸シユトラウス学派の認識——トランプ支持の論理——を析出するための事例として、本稿では匿名の論者であるデキウスに加えてもうひとり、この西海岸シユトラウス学派の代表的論者を取り上げておきたい。チャールズ・R・ケスラーが、おそらくその適切な人物である。

ケスラーは、クレアモント・インスティテュートのシニア・フェローであるとともに、『クレアモント・レビュー・オブ・ブックス』誌の編集人を務めており、ジャファの後継者の筆頭として、ジャファ死後の西海岸シユトラウス学派を主導する知識人のひとりと言える。<sup>31</sup> そのケスラーは、二〇一六年の大統領選挙戦の最中にいくつもの論説を発表しているが、その代表的なものが、「トランプと保守の大義」(『クレアモント・レビュー・オブ・ブックス』誌のウェブサイトに二〇一六年五月二三日に投稿)である。

ケスラーはこのなかで、本稿冒頭で紹介したクリストルのトランプ批判にも含まれていたように、トランプはカエサル主義者であるという批判に触れている。ケスラーは、トランプはカエサルのような人物ではないと主張する。トランプがしたいことは「大きな取引をすること、美しい建物を建てること、人びとの目にある種の後援者として映る

こと」であり、かれにはキケロがカエサルについて指摘したような「支配にたいする欲望 (libido dominandi)」つまり「根本的に政治的な魂 (the deeply political soul)」が良くも悪くも欠けているとケスラーは主張している。<sup>(32)</sup>

ケスラーはまた、多くの人びとが指摘するポピュリストとしてのトランプというしばしば否定的な評価にも言及している。この点について、ケスラーはトランプがポピュリストであることを否定しないものの、アメリカ的な意味において、つまり肯定的な意味でポピュリズムを理解するように釘を刺している。すなわち、アメリカにおいてポピュリズムは、「農夫や小企業経営者への敬意、新しい製品や市場を開拓する起業家への敬意、自らの富をほぼ独力で稼ぐ独立企業家への称賛<sup>(33)</sup>」と結びついてきたという。

そのうえでケスラーはデキウスと同様に、アメリカは危機に陥りつつあるという認識を展開していく。ケスラーにしたがえば、すべての共和国はいずれ「ワイマール問題と呼ばれるかもしれないもの<sup>(34)</sup>」に直面する。すなわち国民文化は、エリートのものであれ民衆のものであれ衰退し、共和主義の統治を支えるのに必要な諸々の徳は危機に瀕する。アメリカもまた例外でないことは、ケスラーの行間に示唆されている。ただし、ケスラーにとってアメリカという共和国の現下の危機の兆候は、トランプの成功にあるのではなく、トランプ以外の一人の共和党の候補者たちの失敗にこそあると思われた。<sup>(35)</sup>

では、トランプ以外の候補者たちは何故、支持を十分に拡大することができなかったのか。その鍵はなによりもポリテイカル・コレクトネスにあるとケスラーはみなしている。「アメリカにおいてふたつのもつとも声の大きな、それゆえに結果として影響力のある社会政治的勢力が、ポリテイカル・コレクトネスとドナルド・トランプであるのは偶然ではない<sup>(36)</sup>」。要するに、トランプはカエサルではなく、アメリカの善きポピュリズムの伝統に位置づけ可能な、

カエサルが登場を抑える存在として位置づけられる一方で、ケスラーにとってはポリティカル・コレクトネスこそが、共和国に危機をもたらそうとしている当のものであった。

実際にケスラーは、「ポリティカル・コレクトネスは深刻な全体主義的政治」であると明言している。<sup>(37)</sup> ケスラーにしたがえば、ポリティカル・コレクトネスは、リベラル系のニューズ・ウェブサイト「ヴォックス」(Vox)の若手コラムニストであるエメット・レンシン (Emmett Rensin)<sup>(38)</sup> がリベラリズムにおける「独善的スタイル (snug style)」と呼んだものを表現したものである。端的に言ってリベラリズムの独善性とは、労働者階級は——リベラルから見れば——明らかに自分たちの経済的利益に反した投票をどうしてするのかという問いにたいして、「おバカな田舎者は、なにが自分たちにとって良いことかわからないからさ」と答えてみせる、自分たちは物が分かっているという——労働者階級と対置される知識階級の——確信に集中的に表現されるという。ケスラーのみるところ、オバマ大統領もそうした独善性を隠すことができていない。この点でとくにケスラーが挙げているのは、「いかにオバマが即座にそして恥知らずにも、同性婚の反対から賛成にまわったか」ということである。<sup>(39)</sup> このように、ポリティカル・コレクトネスとオバマとを結びつける象徴的な争点として同性婚をまず挙げるケスラーには、かれの師と言って良いジャファの遺志を継いだ、社会的保守としての立ち位置を明瞭に見てとることができるだろう。

他の共和党の候補者たちが細かな政策にこだわるなか、反ポリティカル・コレクトネスであることは最初から、トランプの選挙戦の中心的な論点であった。すなわち、シンクタンクが喜ぶような財政や外交の諸問題ではなく、「P C (ポリティカル・コレクトネス) リベラリズム」の攻勢に立ち向かうことこそが根本的な課題であることに、トランプだけが気づいていたということである。トランプの政策が一向に見えてこないことはしばしば批判される。だが、



細かな個々の政策に拘泥せず、反ポリティカル・コレクトネスに象徴される原理的な問いかけに傾注したことは、トランプのむしろ評価されるべき点であるとケスラーはみなしている。

もちろんケスラーもまたデキウスと同様に、トランプが完全に理想的な大統領であるとは考えていない。とくにトランプが、建国の父祖たちの政治哲学ならびに憲法に敬意を払っていないことにたいして、ケスラーははっきりと不満を述べている。しかし、トランプが正しい方向に向いており、今後の可能性次第で、かれのリーダーシップがアメリカの核となる価値の擁護と緊密に融合する余地は十分にあるとケスラーはみているように思われる。そうした不満と可能性は、端的につきのように述べられている。

悲しいかな、かれはほとんど憲法やアメリカの建国の原理に言及しない。それは近視眼的であり誤りである。かれがそれを正すかはわからない。仮にかれが正したならば、かれはメキシコ人の慣習 (custom) からアメリカ人の慣習へと議論を広げることができるだろう——究極的な関心事であるアメリカ化は、合法移民にとつただけでなくアメリカ生まれのものにも必要である。かれの機転の利いたPC反対は、アメリカの擁護に近いものを含意している。なぜならポリティカル・コレクトネスが代表しているのは、アメリカにたいする中傷に他ならないからである。PCリベラリズムはそこで終わらない。その敵意は、西洋の神学、哲学、文学、科学の遺産にまで及んでいる。しかし自由も、「ここでは、(アメリカ国内では)始まっているのだ (But freedom, too, begins at home)」。〔強

調は筆者〕<sup>(40)</sup>

かつてシュトラウスは一九六四年刊行の『都市と人間』の序論で、西洋がその目的を確信できなくなった、その意味でのわれわれの時代における西洋の危機について述べていた。その弟子であるジャファは、シュトラウスが『自然権と歴史〔自然的正と歴史〕』の序論で触れている「万人は平等に創造されている」という独立宣言の核心をふたたび見出したリンカンの復権に取り組むことで、西洋の危機の回避とその再生は、アメリカの原理の回復にかかつてい<sup>(4)</sup>ることを示そうとした。そのうえでジャファは、この点を見定めていないと思われた他のシュトラウスの弟子たちと、袂を分かった。

今日、ジャファの弟子たちにとって、アメリカの原理を乗り越えられるべきものとみなし、自然／本性による道德の基礎づけを否定するリベリズムの終極の形態、つまりポリテイカル・コレクトネスの<sup>(4)</sup>際限のない進撃をくいとめる存在として、トランプは姿をあらわした。それゆえにかれらにとって、いかにこのトランプが不完全極まる人物だとしても、冷戦が終わった後もアメリカ国内においてなお続く、内なる西洋の危機とかれらがみなすものを回避するためにはどうしても賭けなければならない存在として映ったのである。

#### 4 もうひとつのネオコンの隆盛の始まり？

ポリテイカル・コレクトネスこそが現下における最大の賭け金であるという認識は、前節のケスラーだけでなく、本稿の冒頭で名前を挙げたアンジェロ・M・コードヴィラやエドワード・J・アーラーといった西海岸シュトラウス学派の他の論者たちによっても共有されている。なお、デキウスならびにケスラーの主張にも垣間見られることだが、

かれらのポリテイカル・コレクトネス批判は、それを支持してきたリベラルなエリートへの批判、さらにはそうしたエリートたちが主導しているとかれらがみなす行政国家への批判と、密接に結びついていることを強調しておく必要がある。たとえば、ポリテイカル・コレクトネスを「支配階級 (the Ruling Class)」が仕掛けているヘゲモニー闘争であると位置づけているコードヴィラは、「アメリカの支配階級は、アメリカの他の人びとは再教育キャンプの囚人のように扱われるべきであるという見解を採用してきたようにみえる」と述べている。<sup>(42)</sup>コードヴィラは、アメリカを支配しているとかれらがみなす超党派的な政治的エリートたちを「支配階級」と名づけ、かれらに抗する人びとを「カントリー階級 (the Country Class)」と名づけたうえで、この二つの階級間の逃れがたい闘争の存在を指摘している。<sup>(43)</sup>本稿で触れたデキウスによる「ダボス階級」をめぐる指摘にも見られるように、ある種の階級闘争として現在のアメリカの状況を捉える認識が、西海岸シュトラウス学派のなかには伏在している。この点で、連邦政府の介入とその肥大化をもたらすエリート層である「ニュークラス」の台頭を指摘したうえで、かれらとの対決を意識した、新保守主義 (Neoconservatism) の知識人たちとの連続性と共通項を見出すことはおそらく可能である。<sup>(44)</sup>

ただし、『ニュー・リパブリック』誌のジート・ヒアがすでに指摘しているように、東海岸のシュトラウス学派に連なる人びとも無関係ではなかった二〇〇〇年代のネオコンが、アメリカ国外の非民主的な国家の体制転換に乗り出したのとは対照的に、二〇一〇年代後半の西海岸のシュトラウス学派を中心とした新しい——社会的保守の方向に傾斜した——ネオコンは、ケスラーによるポリテイカル・コレクトネス批判とトランプ評価のなかに見てとれるように、体制転換はアメリカ国内において始まると考えている点に明確な違いがある。<sup>(45)</sup>

また、東海岸のシュトラウス学派に連なる人びとの一部は、実際に政権にかかわり政策立案に影響を及ぼしたのに

たいして、西海岸のシュトラウス学派は、トランプ政権との具体的なかわりが——すくなくとも現段階において——希薄であり、世論形成にひとまずのところは重きを置いている点にも差異が見出せる。<sup>(46)</sup>

いずれにしても、トランプ支持という側面に限定してではあるが、ひとつの勢力として西海岸シュトラウス学派が二〇一六年の大統領選挙を画期として、今後の実際の影響力は未知数としても、明確な存在感を示し始めていることは確かなことである。ジャファの遺志を継ぐかれら西海岸シュトラウス学派は、アメリカにおける保守主義の再構築を目指していると言える。かれらのこの再構築の試みが、トランプ政権の今後の推移とどのように連動していくのかについて、今後とも注視していく必要があるだろう。

(1) たとえばG・W・ブッシュ政権で國務長官を務めたコリン・パウエルはトランプを批判し、ヒラリーを支持する発言をしたことが報道された。ジョージ・H・W・ブッシュとG・W・ブッシュは大統領選挙戦のあいだ、トランプにたいする支持を表明しなかった。G・W・ブッシュ政権においてポストに就いていた、ネオコンとして知られたポール・ウォルフowitzツやロバート・ゼーリックは、トランプ批判を堅持した。共和党関係者のトランプにたいする態度表明は以下にまとめられている。 <http://www.theatlantic.com/politics/archive/2016/11/where-republicans-stand-on-donald-trump-a-cheat-sheet/481449/> (最終閲覧日二〇一七年一月一四日)。

(2) その二名の保守の知識人たちは、グレン・ベック (Glenn Beck) / デイヴィッド・ボアズ (David Boaz) / L・ブレント・ボゼル三世 (L. Brent Bozell III) / モナ・チャレン (Mona Charen) / ベン・ドミニク (Ben Domenech) / エリック・エリックソン (Erick Erickson) / スティーヴン・F・ハイワード (Steven F. Hayward) / マーク・ヘルプリン (Mark Helprin) / ウィリアム・クリストル (William Kristol) / ユヴァル・レヴィン (Yuval Levin) / ダナ・ローシュ (Dana Loesch) / アンドルー・C・ブッカーシー (Andrew C. McCarthy) / ウェイヴィッド・ブッキントツシユ (David McIntosh) / デイヴ・メド (Michael Medved) / エドウィン・ミース三世 (Edwin Meese III) / ラッセル・ムーア (Russell Moore) / マイケル・B・

- ムカジィ (Michael B. Mukasey) 、ケイタイ・パウリッチ (Kate Pavlich) 、シモン・ポドホレツ (John Podhoretz) 、R・R・レノ (R. R. Reno) 、トープス・ソーウエル (Thomas Sowell) 、カル・トープス (Cal Thomas) による。 *National Review*, vol. LXVIII, no. 2 (February 15, 2016), pp. 26-38. 息子のシモンとは対照的に、ノーマン・ポドホレツは反・反トランプの立場をとり、よくにオゾン政策下の民主党の対中東政策にたいする批判を含めて、より悪くない選択肢としてトランプを支持した。 <http://www.timesofisrael.com/norman-podhoretz-the-last-remaining-anti-trump-neoconservative/> (最終閲覧日二〇一七年一月一六日)。
- (3) *National Review*, p. 27.
- (4) *National Review*, p. 32.
- (5) Robert Kagan, "This is how fascism comes to America." in [https://www.washingtonpost.com/opinions/this-is-how-fascism-comes-to-america/2016/05/17/c4e32c58-1c47-11e6-8c7b-6931e66333e7\\_story.html?utm\\_term=.951cf6ed71bd](https://www.washingtonpost.com/opinions/this-is-how-fascism-comes-to-america/2016/05/17/c4e32c58-1c47-11e6-8c7b-6931e66333e7_story.html?utm_term=.951cf6ed71bd) (最終閲覧日二〇一七年一月一四日)。
- (6) George F. Will, "If Trump is nominated, the GOP must keep him out of the White House." in [https://www.washingtonpost.com/opinions/if-trump-is-nominated-the-gop-must-keep-him-out-of-the-white-house/2016/04/29/293f7f94-0d9d-11e6-8ab8-9ad050f76d7d\\_story.html?utm\\_term=.d02e902886dd](https://www.washingtonpost.com/opinions/if-trump-is-nominated-the-gop-must-keep-him-out-of-the-white-house/2016/04/29/293f7f94-0d9d-11e6-8ab8-9ad050f76d7d_story.html?utm_term=.d02e902886dd) (最終閲覧日二〇一七年一月一四日)。
- (7) トランプはその際「もっとも過大評価なれている政治評論家のひとり (one of the most overrated political pundits)」としてウィルをウェブ (短文投稿サイトである Twitter) 上で名指したうえで、直接の非難をしていゝ。 <https://twitter.com/realdonaldtrump/status/747027629652443136?lang=ja> (最終閲覧日二〇一七年一月一四日)。
- (8) 二〇一六年九月二十八日付で、ウェブサイト「アメリカン・グレイトネス」上で、一二五名の研究者ならびに著述家がトランプ支持を表明している。 <http://amgreatness.com/2016/09/28/writes-scholars-for-trump/> (最終閲覧日二〇一七年一月一六日)。「この署名者のなかには、元下院議長のニュート・キングリッチの名もある。
- (9) プブリウス・デキウス・ムスにくわえて、ベン・ボイチャク (Ben Boychuk) やクリス・バスカーク (Chris Buskirk) といったウェブサイト「アメリカン・グレイトネス」の運営スタッフもみな「クレアモントとの密接なつながりを有している。
- (10) ジャファはクレアモント・マッキナ・カレッジ (Claremont McKenna College) 、ならびにクレアモント大学院大学

トランプをめぐるアメリカ保守主義の現在 (井上)

- (Claremont Graduate University) で教鞭をとり、西海岸シュトラウス学派に連なる者たちを弟子として育てた。
- (11) テヴィ・トロイがすでに指摘しているように、「西海岸」という呼称は必ずしもこの学派に関係する人びとの地理的な分布と対応しているわけではない。ウィルモア・ケンドールと縁の深いダラス大学 (The University of Dallas) の関係者は、クレアモントと交流が長らく盛んである。クレアモント・インスティテュートの所長を務めていたラリー・P・アン (Larry P. Ann) は現在、ヒルズデール・カレッジ (Hillsdale College) の学長を務めており、クレアモント・インスティテュートのシニア・フェローであるハドリー・アークス (Hadley Arkes) はアムハースト・カレッジ (Amherst College) の名誉教授である。Tevi Troy, "Why Some Intellectuals Are Breaking for Trump," in <http://www.politico.com/magazine/story/2016/11/conservative-intellectuals-trump-2016-politics-policy-214424> (最終閲覧日二〇一七年一月一六日)。なお、アンとアークスの両者とも、二〇一六年九月二八日付の「アメリカン・グレイトネス」上でのトランプ支持の表明者である。
- (12) ただし誤解のないように付け加えておくならば、この学派のすべての者たちが親トランプであったわけではなく、トランプ支持に懐疑的な者、あるいはウィリアム・ヴォーグリ (William Voegeli) のように、反・反トランプという立場をとった者もいる。
- (13) 詳細は以下の拙稿を参照いただきたい。「分かれたるシュトラウスの危機をめぐって——H・V・ジャファの政治哲学」、西永亮編『シュトラウス政治哲学に向かって』(小樽商科大学出版会、二〇一五年)所収、一九九二〇〇頁。
- (14) ジャファは二〇〇一年に『クレアモント・レヴュー・オブ・ブックス』誌に寄稿した論考のなかで、アリストテレス的なロクク——ないしはロクク的なアリストテレス——に基づくアメリカ建国というテーマは「一九八七年以来」自らの著述のなかではっきりしたものになったと述べている。まさに一九八七年は、後述するようにアラン・ブルームが『アメリカン・マインドの終焉』を出版し、そのなかでアリストテレスとロククを対置したうえで、ロククを利己心や自己利益の哲学者とみなす議論を提出した年である。Harry V. Jaffa, "Aristotle and Locke in the American Founding," in *The Claremont Review of Books*, vol. 1, no. 2 (Winter 2001), p. 10. 一九八七年はまた、ジャファが「分かれたるシュトラウスの危機」と題した論文を発表した年でもある。この論文は、ジャファのシュトラウス理解についても言及しているディネシヌ・ドゥッサーザ (Dinesh D'Souza) のシュトラウス論にたいする批判として書かれたものである。Harry V. Jaffa, "Crisis of the Strauss Divided: The Legacy Reconsidered," in *Social Research*, vol. 54, no. 3 (Autumn 1987), pp. 579-603.

- (15) 前掲拙稿、二〇五頁。
- (16) Harry V. Jaffa, *American Conservatism and the American Founding* (Durham: Carolina Academic Press, 1984). 本稿ではケレブモンテ・インズナイチャーから再版された二〇〇二年版を参照している。
- (17) Harry V. Jaffa, *American Conservatism and the American Founding* (Claremont: The Claremont Institute, 2002), p. 265.
- (18) Jaffa *ibid.*, p. 274.
- (19) Jaffa *ibid.*, p. 274.
- (20) Jaffa *ibid.*, p. 274.
- (21) Allan Bloom with Harry V. Jaffa, *Shakespeare's Politics* (Chicago: University of Chicago Press, 1964). 松岡啓子訳『シェイクスピアの政治学』(信山社、二〇〇五年)。ジャファが担当している『リア王』に关する最終章は、翻訳刊行にあたって割愛されている。
- (22) Scot Zentner, "The Philosopher and the City: Harry Jaffa and the Straussians," in *Interpretation*, vol. 30, issue 3 (Summer 2003), p. 274.
- (23) Allan Bloom, *The Closing of the American Mind* (New York: Simon & Schuster), p. 344. 菅野盾樹訳『アメリカン・マインドの終焉』(みすず書房、一九八八年)、三八一頁。なお、翻訳は二〇一六年に新装版がみすず書房より刊行されている。
- (24) ブルームは『アメリカン・マインドの終焉』のなかで、アリストテレスとロックとを明確に対置している。ブルームによれば、アリストテレスにとって善き体制は、共通善 (the common good) に献身する統治者たちを擁するのたいてい、悪しきそれは、私的利益を増進させるために自らの地位を利用する統治者たちを擁する。ロックはモンテスキューとともに、このようなアリストテレスの区別をしておらず、かれらにとって善き体制は、それを構成する利己的な人びと (selfish men) を満足させるのに適切な仕組みをそなえたものであり、悪しきそれはかれらを満足させることに成功していない体制であるとブルームは主張している。Bloom, *ibid.*, p. 178. 前掲訳書、一九一頁。
- (25) なお、ブルームがゲイであることはシュトラウスの弟子たちのあいだでは半ば公然の事実であった。そのことをジャファもわかったうえで、沈黙にたいする批判をおこなっていることは指摘しておかなければならない。Joseph Epstein, *Gossip: The Unofficial Pursuit* (Houghton Mifflin Harcourt, 2011), p. 146.

- (26) Harry V. Jaffa, "Humanizing Certitudes and Impoverishing Doubts: A Critique of *The Closing of the American Mind* by Allan Bloom," in *Interpretation*, vol. 16, no. 1 (Fall 1988), p. 112.
- (27) Jaffa, *ibid.*, p. 113.
- (28) Jaffa, *ibid.*, p. 113.
- (29) 掲載されているのは、一九四二年四月二五日の結婚式当日の写真、結婚六〇周年の写真、そして一九四一年のポトマック川でカヌーに乗るあたりの写真である。Harry V. Jaffa et al., *Crisis of the Strauss Divided: Essays on Leo Strauss and Straussism and East and West* (Lanham: Rowman & Littlefield, 2012), pp. 35-37.
- (30) 本節で参照しているネキウスの論説 "The Flight 93 Election" は、『ナレマゴント・レサチャー・オブ・ブックス』誌のウェブサイトから取得している。http://www.claremont.org/crb/basicpage/the-flight-93-election/ (最終閲覧日二〇一七年一月一四日)。この論考は「アメリカン・グレイトネス」のウェブサイトにも転載されている。http://amgreatness.com/2016/09/05/flight-93-election/ (最終閲覧日二〇一七年一月一四日)。
- (31) ケスラーは、ウッズ、ロウ・ウィルソン、フランクリン・ローズヴェルト、リンドン・ジョンソンとの比較の下にオバマ——ならびにその根底にある革新主義とリベラリズムの思想的系譜——を批判的に検討した著作を刊行している。
- Charles R. Kesler, *I Am the Change: Barack Obama and the Crisis of Liberalism* (New York: HarperCollins Publishers, 2012). それ以外に、一九八〇年代に以下の編者がある。Charles R. Kesler ed., *Seeing the Revolution: The Federalist Papers and the American Founding* (New York: Free Press, 1987); Charles R. Kesler and William F. Buckley Jr. eds., *Keeping the Tablets: Readings in American Conservatism* (New York: Harper Collins, 1988).
- (32) Charles R. Kesler, "Trump and the Conservative Cause," in *The Claremont Review of Books*, vol. XVI, no. 2 (Spring 2016), p. 11. テキウスもまた「ウェブサイト「アメリカン・グレイトネス」上での読者との論争をうけて、トランプはカエサルではないと繰り返し強調している。そのうえでテキウスは、むしろ来るべきカエサルを避けるためにトランプ政権は被治者の同意を回復しようとするかもしれないと述べている。ただしかれは、トランプ政権はそうする「かもしれない」どころ点をあくまでも強調している。http://amgreatness.com/2016/11/07/the-bankruptcy-of-conservative-intellectuals/ (最終閲覧日二〇一七年一月一四日)。



(33) Kessler, *ibid.*, p. 11.

(34) Kessler, *ibid.*, p. 12.

(35) トランプは個人的な諸々の悪徳によって、保守を含めた多くの人びとによって非難されているが、ケスラーはこの点について、比較的な視点からの考察がなされていないと主張している。すなわち、ジョン・F・ケネディの隠されていた私生活と比べて、あるいはビル・クリントンの不誠実な私生活と比べてどうか。あるいはトランプの利己的な性格は、夫人を中傷した男と決闘をして殺したアンドリュー・ジャクソンと比較してどれほどのものなのか。こうした検討がなされていないと反論している。なお、ケスラーはトランプの政治家としての経験不足に堪える懸念について論じた後で、トランプが自分のモデルを早期に見つけることを期待しているが、そのモデルとしてケスラーが挙げるのがセオドア・ローズヴェルトである。西海岸シユトラウス学派は、権力分立を破壊するような無制限な権力を志向する行政府を求めたとかれらがみなすウィルソンにたいしてきわめて批判的であるのにたいして、セオドア・ローズヴェルトに好意的な評価を与える傾向がある。以下の論考はその例である。 Will Morrissy, "Theodore Roosevelt on Self Government and the Administrative State," in John Marini and Ken Masugi eds., *The Progressive Revolution in Politics And Political Science: Transforming the American Regime* (Lanham : Rowman & Littlefield Publishers, 2005), pp. 35-71.

(36) Kessler, *ibid.*, p. 14.

(37) Kessler, *ibid.*, p. 15. このような政治がもつとも好都合にも達成されているのは、ケスラーによればリベラルな知識人によって占拠されている大学のキャンパスである。

(38) エメット・レンシンは二〇一六年六月、ウェブ上で反トランプの人びとに暴動を起こすように呼びかけたことば、「ヴォッククス」で停職処分を受けた。詳細は下記を参照のこと。 <http://money.cnn.com/2016/06/03/media/vox-editor-suspended-trump-riots/index.html> (最終閲覧日二〇一七年一月一六日)。

(39) Kessler, *ibid.*, p. 16.

(40) Kessler, *ibid.*, p. 16.

(41) Zenner, *ibid.*, pp. 274-275.

(42) Angelo M. Codevilla, "The Rise of Political Correctness," in *The Claremont Review of Books*, vol. XVI, no. 4 (Fall

トランプをめぐるアメリカ保守主義の現在(井上)

2016), p. 42.

(43) Angelo M. Codevilla, *The Ruling Class: How They Corrupted America and What We Can Do About It* (New York: Beacon Books, 2010), p. 63. この本の序文は保守のラジオホストとして知られるラッシュ・リンボーが執筆している。

(44) ニュークラスをめぐる議論については、さしあたり以下を参照のこと。佐々木毅『アメリカの保守とリベラル』（講談社学術文庫、一九九三年）、三九―四一頁。

(45) Jeet Heer, "The Pro-Trump Intellectuals Who Want to Overthrow America," in <https://newrepublic.com/article/137410/pro-trump-intellectuals-want-overthrow-america> (最終閲覧日二〇一七年一月一六日)。

(46) ただし、ジョン・マリーニとケン・マスキは、連邦最高裁判事のクラレンス・トーマスが一九八〇年代に雇用機会均等委員会委員長を務めた際、特別顧問を務めており、トーマスは両者からの影響を認めている。この点に限っても、西海岸シユトラウス学派は、実際の広義のアメリカ政治にすでに一定の影響力を有していると言える。

〔付記〕

本稿脱稿後の二〇一七年二月、それまで匿名を保っていたデキウスが、マイケル・アントン (Michael Anton) であることが明らかになるとともに、そのデキウスことアントンが、国家安全保障会議の戦略的コミュニケーション担当次官補に就任したことが発表された。アントンはルディ・ジュリアーニやG・W・ブッシュのもとで側近として仕事をした過去をもつ。かれはクレアモントの卒業生であり、ジャファを偉大な師として仰ぐとともに、シユトラウジアンであることを今日においても自認している人物である。デキウスの正体が明らかになったことで、西海岸シユトラウス学派とトランプ政権との具体的ななかかわりは希薄であると記した本稿末尾の記述は、早くも修正されなければならないだろう。ここにそのことを付記する次第である。

(神戸大学国際文化学研究所准教授)